

文献紹介 多和田眞淳「東苑隨想」・「東苑隨想 その二」

BOOK REVIEW: TAWADA SHINJUN "TOEN ZUISO", "TOEN ZUISO 2"

安里 嗣淳

Asato Shijun

ABSTRACT : Tawada Shinjun is one of the pioneers of Okinawa archaeology. His paper, "Distribution of Shell Mounds and a Concept of Chronology in Ryukyu Islands", published in 1956, became a foundation for Okinawa archaeology. Two years earlier, Tawada also had written two articles related to this paper for a local newspaper, but these articles were not included in his anthology, published in 1980. This review aims to re-introduce those articles in order to further the development of Okinawa archaeology.

多和田眞淳は沖縄考古学の開拓者である。彼が1956年に発表した「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」は、沖縄考古学の基礎的論考である。しかし、彼はこの編年につながる別の論考を、その2年前にすでに地元の新聞に発表していた。それは1980年に編まれた『多和田眞淳選集』には掲載されていない。したがって、沖縄考古学研究に資するためにこれらの新聞論考を、あらためて活字化して紹介することとした。

論考は2編である。

「東苑隨想 奄美大島の貝塚分布」『琉球新報』1954年1月8日～14日・7回

「東苑隨想 その二 沖縄列島の貝塚分布」『琉球新報』1954年3月10日～14日・5回

私はさきに「多和田編年成立の背景と後期区分の再評価」『南島考古』No.26 2007においてこれらの新聞論考の一部を紹介し、同論考が1956年の「多和田編年」へつながることを指摘した。また、これらの新聞論考発表の背景・動機についても触れた。さらに同年6月3日の「多和田眞淳先生生誕百年記念シンポジウム」において、多和田編年の分析と評価を提示した（同レジュメ集『沖縄考古学の現状と課題』）。

したがって、ここでは文献解題を付した紹介はしないので、上記の拙文を参照されたい。ただひとつ、上記レジュメ集でも触れたことであるが、くりかえし指摘しておきたい。「東苑隨想 奄美大島の貝塚分布」の冒頭に「私は去年の十二月二日から三十日までの約一ヶ月間奄美大島地方の林業調査を行った・・・以下略」とあり、新聞の日付「1954年1月」と照合すると奄美調査は「去年」の「1953年」となる。しかし、続く文章や他のいくつかの論考から、それは「1952年」が正しいことは確実である。これは「多和田編年」がいつから熟成されていったかを把握する上できわめて重要なことである。

東苑隨想

・・・奄美大島の貝塚分布・・・

多和田真淳

一、筆を執る様になった動機

小生は去年の十二月二日から三十日までの約一ヶ月間奄美大島地方の林業調査を行ったが多年小生が研究している貝塚を通しての日本民族移動を調査するのも個人的な大事な目的であった。琉球新報の国吉真哲氏からその結果を発表するようにすすめられたが延々となってしまった。

最近那覇高校の金城氏から琉球貝塚の分布に関する執筆を依頼され現在資料整理中のところ、本日（一九五四年一月四日）はからずも大毎鹿児島版昭和二十八年十二月二十三日発行第一面三千年前の人骨発掘完全な形で出水貝塚から、常楽院や桜島など第二次県指定文化財に答申の表題記事中「なお復帰する奄美大島が南方動植物の宝庫であり各島の民族文化は琉球のそれと深い関連を持っている点から同日の専門委員会では奄美大島の文化財調査のために十分予算措置を講ずるよう要望した。」に大なるショックを受け矢も盾もたまらず筆を執った次第である。

二、旅日記

調査に関する旅日記は後//研究家に必要な資料となるので文語口語混じりの至って拙いものながら左に掲げる。

十二月二日 晴、夜雨風

午後一時美島丸那覇出港、洲鎌君が見送ってくれた、桟橋に林清国氏と十幾年ぶりで会う、官房長か誰かの見送りに見えていた、その他は見知らぬ顔ばかり。海は静かでよい出港日和だった。港外から眺めた沖縄南部の姿は戦争直後と較べて復興の一途をたどりつつあるたくましい頼もしさとでも表現し様か。読谷山、座喜味城跡を遙かに見はるかす国頭連山のすみ絵のような美しさ、それを背景にした大那覇港の姿を今更の如く眺めた事だった。一寝入りして波のうねりを感じた。どれ位走ったらうか、へさきへあたる波が強くなりそのしぶきが左舷を洗うようになり船は左右動を初（始）めた。走航すること八時半向い風で波強く惜しいことに逆航して本部と瀬底との海峡に避難せねばならなかった。

三日午後三時半出帆曇

四日、午前十一時半名瀬着、雨

夜エール大学嘱託鳥類の小野氏と共に林野関係職員の歓迎会を受く。

五日、午前九時名瀬発新村十二時半着。八野国有林採集、今年最低の底冷に会う。

六日、午前新村役勝採集十二時半新村発午後四時半古仁屋着。田崎君の出迎を受く（曇天）

七日、午前九時半海津崎採集、雨天。

八日、雨採集不能、古仁屋初校付近クロガネモチ熟す。ユスラヤシ町内に栽培、町内川辺アコウらしき物（オウバアコウ近品）あり。夜七時半出帆篠川に向う、サルベージ船新光丸故障し夜となる、やむなく昭和丸（篠川定期）にて夜九時前着

九日、曇時々雨、篠川発新村に向う、途中深山苗畑の杉広葉杉苗を見る。杉の二カ年大苗施肥したもの五尺以上となり移植に不適な程也、苗木は叫佐則常庸夫よく經營す。古仁屋より三島広助氏（森林主事湯湾駐在）同伴

十日、晴、曇、時々雨、新村発湯湾へ、揚子木という樟科の小けう木（アオモジ）、ウシクサの大型品等を途中見る。湯湾近くタネツケバナ類似大型品水中に生ず、田畔ヨメナに近き品あり。

筒状花の集合直径小舌状花の紫色濃く甚だ長し、晩三島氏持参のシマミカン（シーカーサーに似て甘く美味）を鱈腹食う作島君塙サバを食い番茶を急須の三杯も飲む。○美人揃の部落。

十一日 晴天、湯湾発、福本着。三島氏同伴湯湾岳登山、珍種多し、午後五時頃マンガン鉱山で河野森林主事に会い河野氏先導福本部落に向う。夜は福本移住部落民と懇談、移住民の苦境を聴く、援助の要を痛感す。（小生は八重山移住の専任技師であったし、第二回目までの移住は小生が担当した。）

十二日 朝雨、後晴。福本発、大兼久、音勝着。

大和旅館で林務係官榎氏と同宿。榎氏の好意により明日は岩崎山採集行と決す。ハブの話に花が咲く。

十三日 音勝泊、晴天。

海岸にてカナムグラ採集、笠利村に多き由。岩崎山採集ヒメナベワリを二、三採る。川中でヒメハブ（クファー）川岸で五尺二寸のハブをしとめる。ナゴラン見えず、チケイラン、エリヤ一種等を採る。

十四日 晴、音勝発名瀬着。名瀬発赤木名泊。

午後二時名瀬発赤木名行自動車に乗る。五時半着、郷土博物館職員山下氏、林務官上野氏同伴す、大島教職員組合の井上氏と四人宿泊。

十五日 晴、赤木名、宇宿、笠利泊。

宇宿貝塚にて土器発掘。綾丸岬にてヤマラッキヨウ、オウマツバシバ採集。宇宿にては小学校長松田氏の好意に接し、笠利にて名瀬警察署長松井氏と同宿、村有志と酒を汲み交す。佐仁小学校長安田氏の好意により二日間氏をわざらわす。

十六日 雨、笠利発、用、佐仁、赤木名着。

マルバグミ開花、屋仁耕地整理田ぼの近辺にて採集。佐仁岬にてオウシマノジギクの他シマチカラシバを見、ヒオウギの野生化を見る。

十七日 雨、宇宿貝塚発掘。

校長以下職員の援助を受く、面白き土器の破片出ず。

十八日 晴、赤木名発名瀬着。支庁林務に寄る。郷土博物館にて考古学資料写真を撮る。

夜、山下君の家へ行き馳走にあずかる。熱心なる郷土研究家也。資料多数の中、入ずみ集異彩を放つ。

十九日 晴、午前九時名瀬発、鬼界島へ行く。波少しく荒し、次第に和ぐ。午後菅原神社を中心に貝塚らしき感あり、調査す。

二十日 鬼界町、湾発小野津行き、途中伊佐根久部落が貝塚の跡らしく感ず。小野津かり又水、源為朝のカブラ矢の抜け跡より発せりという泉を見る。鬼界島のシマアザミは純粋なる紫色で丁度イリオモテアザミの如し。伊佐根久貝塚つきとめ得ず残念也。

二十一日 午前雨、午後曇。

昨夜より海荒れ出し、今朝は時化となる。当分出帆の見込なし。午後から中里部落砂丘貝塚探索、発掘す。中心地は破壊せられたるが如し。宇宿貝塚似の浮紋一個の他皆無紋也。帰途湾菅原神社貝塚を探索す。或はこの貝塚も破壊せられたるか、これは余程大なる貝塚なりしやと思わる。日暮れ明朝を期す。

二十二日 晴、天気和らぐ。朝菅原神社一帯を調査、湾小学校長の好意で道具を借りて発掘。有紋土器破片は只一個のみ。午後より校長同伴荒木貝塚へ、荒木校に立ち寄り職員生徒の手をかりて発掘。貝は多きも土器未発見、近辺より発掘せる石おの荒木小学校にあり。此の貝塚は未知数なり、住居らしきもの多数あり、特に有孔虫砂岩を巧みに利用せる精巧なるたて穴あり、注意を要す。

病（二カ）十三日 晴 鬼界島発名瀬着

天神丸は午前十時ごろ出帆、午後二時ごろ名瀬着、林務を訪ね松本氏の案内で名瀬苗畑見学、やせた段々畑にて苦勞多きものと認む。杉の実生の赤渋的な目的現象は何？ 米国樹種は良好なる方なり、日暮

れて帰館す。博物館の山下氏と夜十一時ごろまで放談す。

二十四日 午前十時ごろ名瀬発徳の島に向う、瀬戸内入口辺で風向転じ時化模様追手が向風となりしたため案外時間がかかり夜八時半ごろ亀徳着、営林署退庁せるため電話不通、政田旅館宿泊。

二十五日 雨模様、営林所クリスマスのため電話不通、こくて営林所へ行く、隣接の小学校長大川氏に聞き所長宮古氏訪問。林務課の大城君が来ている事が分る。琉球松種子の件なり、本日出帆の由なるも如何なりしや午後徳和瀬苗畠へ所長並に米田氏案内にて訪う。比較的成績良好、特にイジュの実生苗は上成績なり、米国種子の方も幾分発育する見込み、明日は面縄貝塚行。

二十六日 晴 亀津小校長、中校社会科教員並に米田氏同伴面縄貝塚行、第一貝塚弥生式、第二貝塚縄文式、喜念小学校の砂丘貝塚殆んど無紋、喜念県道筋古墳発掘跡地等を見る。アキグミの一種珍しきものあり。

二十七日 晴 三京行（みきよ）

徳之島営林所長以下米田氏、福富氏玉本氏、松岡氏、その他の所員、中学校教員、小学校教員と賑やかに出発、山道を採集しながら行く皆熱心なり。午後二時過ぎ教員団は帰る。所員は三京事務所に夕刻着、晩は暖かき食前の宴を開き、徳之島音楽を三京の老人により演奏、興味津々たるものあり、夕食は三京乙女等の手になるシイタケ料理なり、十一時寝につく。

二十八日 夜中雨降りあやぶまれたが幸晴れ上り、九時半出発。出発に先立ち福富氏指導のシイタケ人工栽培地を見学、二カ年目なる由、数株昨夜の雨で発生、写真にした。夕べ参集されし担当区員をも含せ母間（ぼま）へ出る林道を採集、談笑しながら行く、よき採集行なり。午後四時過ぎ母間に着き支那そばに舌づみを打ち、四分の三トラックにて亀津帰所、途中亀徳にて便船の都合をきく、明後日出帆の予定なり。家の事を思い帰心矢の如し、天気の都合なれば如何ともし難し。夜徳之島担当員営林所員よりの忘年会兼採集会の慰労宴に招かれ感激を新にした。

二十九日 晴 又曇、波は少し荒いが出帆すること。午前中亀津小学校・中学校の採集植物鑑定を終え、午後二時亀徳へ向け三輪車を走らす。午後五時半頃スキウス丸出帆。営林所長宮古氏他職員の見送りを受く、有難きことなり、航くにしたがって波は静かになり三十日晚沖縄本島の美しき夜景を遠望しながら七時半安謝に入港。一カ月に亘る旅行これで終る。

三、貝塚分布

1. はしがき

球陽に太古混沌（こんとん）たる時代に東の海の波は西の海へ西の海の波は東の海へ越えていたと書いてあるが、これは単なる“つくりごと”ではなくて我が琉球列島はその昔は支那大陸と陸続きであったが、地殻の変動によって支那大陸から離れ、その上或時代にはその大部分が海中に沈み又或時代には浮上りこれを幾度か繰返して現在に至っている。

現在の琉球列島は沈下したのが浮上りつつあるので、我々が見ている現在の姿はかつて支那大陸の一部であった時代の琉球太古山脈の残骸である。

琉球では標高三百米の丘陵地にも珊瑚礁がある。之はかつて此の部分まで海中に沈んだ証拠である。琉球列島の珊瑚礁地帯を遠くから眺めると海岸から段々をなし、幾つかの段丘を形造っている。之を海岸段丘と名づける。此の海岸段丘上に歴史以前の人類が住んでいて貝塚を造ったのである。学者は貝塚は昔の海岸地帯に多く出来たと解釈するので、いくつかの貝塚所在地に印をつけこれ等を結ぶとその時代の海岸線が復元されると考えている。

琉球の貝塚は大体海拔三十米から二百米の間にあるので今試みにそれだけ我が琉球を沈下させたとして地図を作るなら、それがその当時の海岸線でなければならない。今沖縄本島に例をとるならば現在

の沖縄本島は南北に長く如何にも沖に縄が浮いた格好をしているが、貝塚時代にはこの縄が切れ切れていた。即ちこの切れ切れの縄は幾つかの地塊で縄の切れ目は水道をなしていたことになる。

球陽の著者はこれをいと簡単に説明したに過ぎない。この球陽の記事は非常に大事なものでこれが充分納得できなければ琉球の貝塚を充分にせん（せつか）明することはできない。

なぜなれば琉球の貝塚は幾つかの遠くあるいは近く離れた帶状の島々に住んだ人々によって造られたからだ。筆者の研究では奄美大島から沖縄本島に至る縄文式土器は総べて密接な関係があり、又彼等の石器材料は時に火山岩が使用されており、甚だ特異な例としては遠く南洋群島の石器が持込まれているのから推して見た時相当の航海技術と造船術が発達していたと見なければならない。之無くして次の弥生文化への移行即ち農業技術特に稻其の他の種子移入は考えられないである。

民族移動の場合に稻種子等を持ち込んだとする考えは早計であろうと思われる。

筆者は奄美大島群島貝塚土器を見て弥生式土器は縄文式土器から次第に発達して来たのではないかと云う考えを持つものであるが之と同様、狩猟文化から農業文化への移行も奄美大島特に徳之島で見たのではないかと云う考えを抱くものである。これは今後の学者の調査にまつ事にして次の各論で貝塚の分布を述べて学者の調査資料にしたいと思う。

2. 各論

便宜上大島本島、徳之島、鬼界島の三つに分けて解説する。沖之永良部与論は未調査につき言及することは出来ない。

イ、大島本島

A. 深道貝塚

宇宿小学校東北方の隆起珊瑚礁類似の丘陵上にあって一部分道路開通のため破壊され夥しい貝類が道路上に遠く散乱している。種々の変化形式のある縄文土器がでるが殊に著しいのは琉球列島で未発見とされていた尖底土器底の出土することと弥生式土器への移行を（示す？）土器口縁の出土することである。

土器紋様は琉球共通の沈線紋、爪形文を主とするが中に奄美産弥生式くし目土器に見られるくし紋のあるのが注目に値する。

B. 宇泊貝塚

宇泊小学校を中心に附近の墓地を合せたのが此の貝塚で之は全く破壊され調査困難な状態にある。

C. 其他

名瀬市付附近から出土した黒色の弥生式有紋（くし目・波状紋）並に無紋の壺が名瀬市郷土博物館に数個保存されている。奄美大島にはけんもん（木の精）の持ち運んだと云われる貝の山が山地の谷（榕谷）樹下にあると聞いたが之は弥生式文化との何らかのつながりがあるものと著者は見ている。

ロ、徳之島

A. 面縄第一貝塚

面縄第一貝塚は面縄小学校敷地にある第二貝塚から二百米位離れた隆起珊瑚礁崖下に形成されているもので明らかに縄文土器紋様の退行現象が見られると同時に弥生式土器の限界内に入っていると思われる。つまり日本本土の如く弥生式土器に影響された縄文土器でなくここでは縄文土器から弥生式土器へ発展した初期弥生式貝塚土器と思われるものが見られる。

日本の如く突然発生している弥生式貝塚でなく、面縄第二貝塚から移行した貝塚である。土器の頸部から口縁部へ反り、底部と胴部との交点の反っているのが他の琉球縄文土器との大なる相違で、第一、無紋の場合もあり第二、肩に隆起紋のある場合もあり、第二の場合には頸部にくし目のある場合と、

粗い斜線の沈線紋のある場合とがある。この肩部の隆起紋は明らかに琉球における現在使用されている壺類の隆起紋に続くものである。同貝塚の貝類は琉球一般の貝塚の貝類とは余程趣の異なるもので時代を決定するのに重要なものである。即ち面縄第二貝塚と比較すると、第二貝塚では外海の貝類を捕集しているのに対し第一貝塚では内海的波の静かな泥土せい息の貝を主としている。それで第二貝塚から第一貝塚に至るまでには相当地形的変化が認められると同時に或は水田に続く波静かな浅海の貝を捕集したのではないかと推察する。

B. 面縄第二貝塚

面縄小学校地続きにある貝塚で砂丘上に形成され、一部は海水にさらわされて消滅しているが、ほとんど未発掘のままだから将来琉球縄文貝塚の研究資料として甚だ貴重なものである。土器は他の貝塚とは著しく相違した赤味の強い特徴のある砂混りの土が使用され、他の貝塚土器と比較して紋様が奔放で線の巾が広く、かつ深く勢よく刻まれているのが特徴といえる。

殆んど他の縄文貝塚と同じ紋様を使用してこれ程著しい感じを与える貝塚は琉球には他にない特異な現象である。

C. 喜念貝塚

喜念小学校隣りの砂丘貝塚で弥生式と思われる土器を出す。口縁が丸くて厚く殆んど現在琉球で使用されている那覇市壺屋製の壺の口を思わせるもので、口縁部に隆線文のあるのは琉球では甚だ珍らしい事例に属するものである。

D. 喜念県道筋古墳

亀津町から喜念部落へ行く途中県道右手にある古墳でドルメン式のものでなく自然に崩落したと思われる珊瑚礁の岩が上からかぶさって出来たトンネルを利用したと思われるものだが内容は持ち去られて今は石器の破片等により僅かにそれと分る程度になっている。

E. その他

伊仙村の佐弁貝塚は都合により調査することができなかった、徳之島では亀津町付近、母間附近にまだまだ発見されると思われるし、田地に近い貝塚は特に注意して調査する（必）要があろう。

ハ、鬼界島

A. 菅原神社貝塚（湾貝塚）

湾小学校裏手神社境内並にその付近一帯が貝塚であるが大部分破壊されている。

縄文式土器破片は一個しか採集されず、他に耳付土器破片（把手）が得られた。特に著しいのは土器底が現在見るような上底高台がでたこと、その底に四個の小穴をあけて紐を通すようにしてあること、又口縁の形式等からして弥生式貝塚に近いものではなかろうかと思われる。

B. 中里貝塚

字中里の県道筋の貝塚で道路工作のため破壊されている。縄文土器破片一個を得たが道路工事中多数の石器が出たが人夫達によって散々に割られ打ち捨てたらしい。

C. ケンドンガサキ、シチロウガハナ貝塚群

これは中里貝塚と一群にすべき貝塚群で中里から東西に伸びる内陸砂丘（こんな砂丘は琉球では鬼界島だけである）上数カ所に形成されたもので今のところ無紋破片ばかりしか見つからないが中里貝塚同様、縄文貝塚に属するものと見ている。ケン殿が崎、七郎が端等人名の残っているのも面白く、砂丘の所々から土器破片が出る。珊瑚礁上でなく、砂丘上に出来た琉球の貝塚は異例に属するもので注意に値する。

D. 荒木貝塚

荒木小学校東方約五百米位の村はずれにある貝塚で未だ発掘品を見ないが、石器、土器が以前その付近から出たらしい、夥しい貝層からなっているが未だ未知数の貝塚で、今後の発掘研究にまたねばならない。たて穴式の隆起珊瑚礁に人工を加えたらしい住居跡と思われるものから見て、又その付近から出た土器を売り食いした人の居る点から見て弥生式貝塚ではないかと思われるが不明である。

E. 伊佐根又遺物散布地

伊佐根又部落とその付近を含む一帯がそれで、特に田ぼ寄りの神社境内付近から隣り合う泉の中に石器破片が多数見られ、それから二百米程へだてた西方畠地の小丘陵地に黒色の腐植土等がある。此の遺物包含地も未知数ではあるが、稻作を営んだ事が予想され、泉付近の田ぼの発掘等将来に興味を残している。

3 むすび

以上を要約すると

- A、琉球にも弥生式文化が存したのではないか
- B、弥生式文化は琉球で発祥したのではないか
- C、恐らく奄美大島古代文化の中心地は徳之島であったであろう。

ということになる。

参考にする文献一冊もなく、参考にすべき日本本土から出土した弥生式土器の一片さえもない現状の琉球でこのような発表をするのは実にけしからぬことではあるが、やみ難き事情から恥を忍んで書くことにした。

東苑隨想 その二 ・・・沖縄列島の貝塚分布・・・

多和田眞淳

はしがき

此處で云う沖縄列島とは琉球列島から奄美群島を除いた全島嶼を指すもので、沖縄本島地方と先島地方の総称に外ならない。

筆者は琉球の貝塚土器は眞の縄文土器ではないと云う声を度々耳にしているが、それは東京の科学博物館あたりで実際に縄文土器を見日本本土の貝塚発掘等を実際に見聞している人の言であるから、或意味に於て一理はあるものと思う。この点からすれば琉球の縄文土器は縄文式系土器という方が一段はっきりするに違いない、しかし日本本土の縄文土器にしても必ずしも常に縄文が伴うものではなく九州地方では初期には縄文がなく縄文が顕著になったのが後期だと沖縄概観で八幡一郎氏が述べられているのを見ても強いて縄文式系土器といわんでも呼び馴れた縄文土器で結構だという考え方を持っている。又かく呼ぶ裏には琉球にも眞正、縄文を施した土器が出てほしいという一種の期待もあるわけである。

しかば今まで出土した琉球の縄文土器の特徴はどこにあるかというと、筆者をして簡明にいわしむれば終始一貫したほとんど円曲線を使用しないヘラガキの沈線文だと答えたい。

爪形文も捺印文も隆起文もあるにはあるが著しい特徴には入らない。徳之島の面縄第一貝塚や、屋我地島の運天原サバヤ貝塚土器に隆線文があつても種々の点から弥生式土器への胎動とみる筆者には縄文土器に包含さるべき性質のものではないと思っているし、所々の貝塚から出るくし目文土器も縄文

土器から除外すべきものと思う。

今一つ縄文土器に入れて不都合なのは、所々の貝塚から出る現在那覇市壺屋産かめと同一形式の口をもった土器であり、特に喜念貝塚から出土した口唇部に直角に二個の著しく隆起した隆線文のある土器に於て然りである。琉球に如何にして稻が渡来し、又琉球の金石併用時代の有無等についても各論でいさかふれて見たいと思う。

各論

一、沖縄本島地方

1. 北部地区

(イ) 屋我地島運天原サバヤ貝塚

屋我地島の運天港に面した運天原のサバヤという洞穴の直下にある貝塚がそれで、大部分破壊され一部見事な貝層が残されている。サバヤという洞穴は住居跡であるが殆んど古代人が住んだ跡方がないまでに遺物は湮滅している。この洞穴のみね続きに一方は粘土を道路工事に運搬して低い断崖となり反対側は畠地として耕作されその間に人一人通れる小路が馬の背になっている箇所があるが、この馬の背は木灰の包含層で明かに住居跡である。粘土を取去らなければ住居跡が判明しあったものを知らぬが故にかかる貴重な文化財が次々に破壊されて行くことは惜しみても余りあるものである。

貝層の中から出土する隆線を有する土器片は徳之島の面縄第一貝塚系で今のところこの系統の土器は二カ所の他知られていない。この形式の土器は琉球地方で直接農耕文化とつながりを有するものと考えられるもので沖縄の戦国時代各部落々々の按司または世の主なるものが支那大陸と直接交易をした時代の土器形式の祖形と見られるものである。

この貝塚の遺物は一部は水田になっている低湿地へ埋没し、一部は部落の埋立に使用されたため現在残っている貴重な包含層は学者による発掘以外みだりに破壊することは慎しむべきである。

(ロ) 屋我地御嶽貝塚

屋我地島最高の御嶽で全体が貝塚であるが沖縄普通の貝塚とは形式が異っている。即ち断崖下に形成されずに岡全体が貝塚でその点八重山の川平貝塚と似ている。この貝塚は未発掘であるし破壊もされていないので如何なるものが出土するか分からぬが表面採集の結果からするとサバヤ貝塚と同一系統に属する。

(ハ) 辺土上原遺物包含地

去年放水路掘さく中人骨と石おのが出てその現品は琉球新報社に保管されている。今年の一月ごろ琉大美術部学生山入端君が貝塚土器破片を採集しているが未発掘故同君の調査により貝塚として近日発表されるものと期待している。種々の点から考察して沖縄普通の縄文土器が得られると思う。沖縄本島北端の遺物包含地として重要視しなければならぬものである。

2. 中部地区

(イ) 長浜貝塚

読谷村字長浜にある貝塚でティランジューという入江を眼下にひかえた断崖下に形成された琉球普通の縄文土器を出す大部分破壊されているが遺物はほとんど残っていた。戦後は未調査のため現在どうなっているか分らない。

(ロ) 牧港貝塚

沖縄で一番低地にある貝塚でわずかに櫛目文土器片が出土する。

(ハ) 崎樋川貝塚

那覇市近ぼうの靈所崎樋川の隆起珊瑚礁断崖下にある貝塚で琉球普通の縄文土器を出土する。戦後大

部分破壊されている。

(二) 城嶽貝塚

珊瑚礁上に形成された珍しい貝塚でしかも那覇市唯一の貴重なものであったが心無き人々により殆んど跡方なきまでに徹底的に破壊された遺跡である。此処から出る縄文土器の文様は一種特別なもので、其他土器形式の異なる土器片も出土した記録がある。八幡一郎氏に従えば琉球で新しい貝塚に属し支那の戦国末から秦代にかけて通用した明刀錢という刀形の貨幣が出土し後世の混入でないからこの貝塚だけは絶対年代が推せるとなっている。大体二千二百年前と思えば間違いないであろう。

(ホ) おぎ堂貝塚

中城々跡付近のおぎ堂部落ナンジャジー（銀岩）にある貝塚で学者から今まで沖縄最古の貝塚とされていた。琉球普通の縄文土器を出す。

(ヘ) 仲宗根貝塚

越來村仲宗根御岳東方珊瑚礁断崖下にある貝塚で琉球普通の縄文土器を出す。仲宗根御岳内の珊瑚礁上からはそのまま無造作に置かれた多数の見事な磨製石おの打製石おのその他石器類が多数発見されたことがある。

(ト) ヤシマ貝塚

越來村胡差農業指導所付近ヤシマガードという泉上方崖下にある貝塚で住居跡を伴い琉球普通縄文土器中おぎ堂の文様と同一な土器を出す。小型石おのと鹿角器を出土したのが注目に値する。鹿角器は未だ他の貝塚からは発見されていない。確かにこの貝塚形成当時まで沖縄に鹿がせい息していたことを物語っている。この貝塚はおぎ堂貝塚よりも古いものである。

(チ) 大田貝塚

中頭郡具志川村字大田にある墓地マチクー原の断崖下にある貝塚で墓地に被われ破壊されてはいるが琉球普通の縄文土器を出す。

(リ) アカジヤンガーベ塚

大田貝塚と一群をなす貝塚で大田貝塚から約二百米位離れた道路脇の段畠上に形成され、独立した隆起珊瑚礁岩塊の横穴住居を伴うている。

(ヌ) 天願貝塚

戦前の天願小学校敷地にある貝塚で琉球普通の縄文土器片を出すこの貝塚の石おのは他の貝塚のものと少し形式が異っている。天願川は最近人工を加えて水路は変更されたものであって昔の天願川は貝塚に沿うて流れていたのである。付近にジチグシク。天願タロージ等貝塚と関連する地名がある。

(ル) 伊波貝塚

琉球最大の縄文貝塚で松村博士の石川チヌヒンチャーベ塚がこれで大山柏氏の伊波貝塚もこれである。伊波城跡付近から下方断崖下チヌヒンチャビラ付近にかけて住居跡貝塚、貝塚時代墓地と広大な面積を有する遺跡である。

日本の大学者でさえ別々に二つの名前を与えた程の貝塚だから今ごろの素人研究家が往々新発見だとさつ覚を起すのは当然とすべきだが琉球普通の縄文土器を出すが特に此の貝塚の特徴は貝器の多い事で学者仲間で有名である。琉球に稻の種子をもたらしたのは此の貝塚人だと考察される節がある。

(ヲ) 勝連南風原貝塚

かつて新聞に発表された貝塚名であるが筆者は未調査につき不明である。

(ワ) 与那城村宮城島シヌグ堂貝塚

宮城島シヌグ堂の隆起珊瑚礁断崖下にある貝塚で琉球普通の縄文土器を出す。

(カ) 中城渡口洞穴遺物散布地

琉球でニービと云う微粒質砂岩にうがたれた洞穴内の壁とその付近一帯に無紋土器破片が見られたが戦後は不明になっている。牧港貝塚系と思われるが今後の研究にまつより致し方がない。著しく退行した土器であり新しい貝塚土器であることには間違いない。附近にサンスクリットの碑がある。

(ヨ) 其他

喜屋武城跡、中城城跡、越來城跡、具志川城跡は貝塚時代人と関係があり石器或は土器片を出すが充分研究されてはいないので後考にまつ。

3. 南部地区

(イ) 与座嶽住居跡

高嶺村与座嶽拝所は穴居住居跡で数個の石器が工事中出て土器破片も伴ったらしいが惜しいことに数個の石器が首里博物館に蔵せられたのみで島有に帰した。

北方断崖面に貝塚があると思われるがこれまた地均しの為多量の土砂石塊が覆い被され今の所発掘困難である。

(ロ) 知念村具志堅ウージ遺蹟

このウージ洞穴のクチャの上部にたい積した粘土層内から鹿の化石が出るが、新石器時代の貝塚とは無関係のようである。しかし今後充分なる注意の下に発掘しなければ明言できないが、今までの発掘作業から考察すればこの鹿の化石と同じ層から消炭の小塊が出土しているから石器時代人に何らかの関連があると見て差し支えなかろうと思う。

鹿化石包含層よりも上層に一時的に新石器時代人がこの洞穴を住居にしていたと見えてわずか乍ら縄文土器の破片が洞穴入口の土中から見出される。

(ハ) 知念上原遺物散布地群

知念上原から王城城跡一帯の断崖上断崖下の所々方々から石器並に土器の破片が得られるので何れかに大きな貝塚があるものと予想されるが未だ発見されていない。

(ニ) ミントン城遺跡

この遺跡は稻作と関係のある貝塚人の住居跡らしくこの点民間伝承とも一致するものの様で、著しい磨製石器と櫛目土器に属すると思われる土器片が出る。

初め稻種子を得様（得よう？）としたのは伊波貝塚人らしく安南辺に出かけて種子を得玉城百名のミー原海岸で難破したらしく、伊波貝塚人のもたらした種子を得て稻作を始めたのがミントン貝塚人の様である。（速断はゆるされんが民間伝承と貝塚土器等からの考察である）

ミントン城遺跡は知念上原遺物散布地群内にあるけれどもその群からは除外すべきものと思われる。

ミントン城遺跡の土器片は面縄第一貝塚土器、運天原サバヤ貝塚土器、具志頭城跡（島尻具志頭）土器等と関係があるものと筆者はみている。

(ホ) 豊見城城跡遺物包含地

城跡は採石したため殆ど原形を失っているが、城の北方の一角にわずかながら遺物を包含したところがあるが大きな期待はかけられない。縄文土器系統と思われる。

(ヘ) 糸満町稻峯屋取遺物散布地

稻峯屋取の水田と湧水を前にした墓地付近に遺物が散布しているが遠く離れた水田の土手からも土器破片が得られた。

(ホ) (ト?) 保栄茂城跡

島尻郡保栄茂城跡からも一種の土器破片が出るが今の所判然としない。

その他南山城、首里城等今後の研究にまたねばならぬ個所が多く特に首里城の如きは専門家の手をわざらはさねば分からぬ不可解な様相を帯びた遺跡である。国頭郡大宜味村の謝名城も発掘せねば判明しない遺跡で遺物が表面に露出していない所にかえって興味がある。

(ト) (チ?) 国吉城跡遺物散布地

糸満町と凹地をへだてた南方の丘陵地で城跡と云はず付近一帯道路上で石器並に石器破片が得られる、道路上の石器破片が濃密な点からして此の付近に貝塚が発見される公算大である。

(チ) (リ?) 久米島の石剣

昭和七年久米島に植物採集を試みた際仲原善忠氏採集と称する石剣二丁を得たので貝塚発見につとめたが果たさなかった。あの石剣は石材が沖縄本島のものとは異なるし沖縄でかゝる石剣は出土していないので注意を要する。

4. 金石併用時代

こゝでいう金石併用時代とは石器を使用しているが貝塚土器は出土しないで磁器の出土するものを指す。従って支那、安南、朝鮮等と交易したと思われるので鉄器等の金属器を使用したと思われるが朽ち果てゝ今は発見できないものと仮定しての時代である。

(イ) 恩納城

恩納と大田部落の境界にある古城でこの古城を築いた時代この地は小さい岬の突端であった事が明白である。天然の隆起珊瑚石灰岩を巧みに利用した本丸があり石垣は天然石で築かれ琉球の古城跡中で非常に古いものと思う。六百年程前北山に滅ぼされる以前この按司は一国の世の主として外国と交易したと思われ各種の磁器破片が出土する。石ふその他の石器も得られる 二の丸までは存するが惜しい事に三の丸と覺しき個所は石材採取のため跡方もなく運び去られ生々しい白膚を見せ、その上層に真黒い遺物包含層たる腐植土が天に沖してバスの上からでもはっきり分かる。

(ロ) 山田城

恩納村山田城の西方崖下の岩影を利用した住居跡で自然の扁平な石を敷ならべた石器時代の住居跡に似た金石併用時代の住居跡である。ここでは磁器破片とともに新石器時代から退行した土器破片も出土する。同じ山田城でも他の個所に形成されたものは歴史時代のものだから混同せぬ様注意しなければいけない。

(ハ) 兼城御岳

糸満町に近い兼城村字兼城にある御岳は琉球の新石器時代から歴史時代への移り変りを示す遺跡である。この一帯にも支那方面と交易した世の主がいたに違いない。

(二) 具志頭城

島尻郡字具志頭には二つの城があるがその一つはタダナ城で今一つが具志頭城である。字具志頭の古島はタダナ城を中心にして出来ていたらしい形跡がある。具志頭城はタダナ城より古い城で此の城に二つの中心地点がある。一つは拝所で今一つはハクスイの塔の立っている地点で時代的に開きがあらうと思はれる。拝所を中心とした個所からは弥生式系と思はれる土器が出る、此土器は明かに面縄第一貝塚系土器に縁があるにちがいない。ハクスイの塔を中心とした個所からは磁器其他陶器 土器破片が出るが之が世の主時代の遺跡と見て差し支へないとと思ふ、つまり琉球の金石併用時代の遺跡である。

二、先島地方

1. 石垣島

(イ) 川平獅子森貝塚

石垣島字川平には三つの貝塚があって何れもスリ鉢形の岡に形成されているのが著しい特徴である。此の獅子森貝塚は遺跡が二重になっていて上層は歴史時代の仲間村遺跡であり下層が石器時代の遺跡と見るのが至当であろう。

(口) 第二貝塚

(ハ) 第三貝塚

第二、第三ともに最近の発見になる貝塚で未発掘であるが形式系統全く獅子森貝塚群に属する。川平貝塚群の出土品は歴史時代のものと混同していると見られる節があり再検討を要するもので今後の慎重なる調査研究にまたねばならない。

(二) 大浜フルスト原貝塚

大浜赤蜂の居城であったフルスト原がそれで日本軍の飛行機誘導路工事の際露出されたものであるが川平貝塚群同様系統の判明しない貝塚である。

その他

八重山群島では石垣島、西表島よりもむしろその周辺の隆起珊瑚の小島を調査することによって多くの発見がなされるのは火を見るよりも明らかである。

沖縄本島の国頭山地が居住地たる中南部地区或いは周辺離島の食糧補給地だったと同様其の法則は直ちに石垣、西表の両島にあてはまるものである。

与那国島と波照間島は文字通り絶海の孤島であり言語風俗を異にする他国との接触点にある重要な島であり此の両島が或程度琉球文化の謎を解く鍵を持っているに違いないと考へるのはあながち筆者一人の思い過しでもあるまい。

尖閣列島には貝塚人の遺跡は皆無であり、宮古諸島は地下水が極端に低いため調査は困難を極めるのは必定である。然し古代人がせっかく見つけた島影をむげに見捨てるはずはなく、何か残して行っているに違いない。古代人がなせしごとく困苦欠乏に打ちかって不斷の努力を払ってこそ発見の喜び研究の喜びに与えられるのである。

結 び

琉大を初め各学校各文化研究会等の茶飲話の中にそんなに貝塚が沢山あるのはおかしい、とか貝塚は案外最近のものだと色々私見なるものが乱れ飛やに聞いているが筆者はむしろ少な過ぎると思っている。一帯古代人の遺物なるものは石灰質の土質には良く保存されるものであるが、国頭郡等の古生層地帯では石器土器以外は朽ち果てて消え去る場合が多い訳で例えあっても発見が困難である。このような湮滅遺跡、発見困難な遺跡を合せるともととたくさんあって良い訳である。また遺跡と遺物というものは長年月永住した場合にも一時的仮住居の場合にも残されるもので、古代人の頭数と遺跡の数との比を数字的に誤算してはならないのである。

貝塚は極最近の遺物には違いない。人類が地上に現われたのがわずかに百万年位前である。しかし沖縄の貝塚は日本本土の貝塚にくらべて新しいという段になると話はまた別である。何を根拠にかくいうかとなればこれまた何の根拠もないである。日本の大学者達さへ沖縄の貝塚は新しくないと見ている。比較的新しい城岳貝塚さえ約二千二百年を経ている。その他の古い貝塚は推して知るべしである。金石併用時代が約千五百年から以前と見て差支えながらうと思う、琉球におけるおもろ研究家はこの辺までさかのぼらねば充分な成果を収める事は不可能であろう、琉球貝塚の発見史は文献が無いため他日にゆづり度いと思う、此の戦争で多くの文献を失ったのはかえすがえすも残念な事である。

訂正 筆者奄美大島の貝塚分布記事に尖底土器とあるのは丸底土器の誤りにつき訂正する。